

Teaching Statement

October 15, 2026

私の teaching philosophy は、学生に(1) 経済理論と因果推論の視点から、多くの経済現象を説明する力、(2) 政策的関心の高い政治経済の諸問題に対し、独創性の高い因果関係の仮説を立て、問いに適したデータと識別戦略で実証研究を設計する力を身につけてもらうことです。

2020年9月の着任以来、270人の大講義から少人数ゼミまで、大学一年生から博士課程の学生までを対象に、週3.5コマ×2学期、日本語と英語の双方で担当しています（資料1）。学部の「応用計量経済学」では、RCT、自然実験、操作変数法、回帰不連続デザイン等の因果推論手法を、「労働経済学」では、George Borjas の『*Labor Economics*』（McGraw Hill）に沿って、理論モデルと実証結果をバランスよく教えてきました。修士課程では労働経済学と応用計量経済学の講義を担当し、博士課程ではワークショップにて正式な学位論文指導を補完するメンタリングを行ってきました。

まず講義で最も意識しているのは、学生の進路に関係なく、「経済学によって世の中の見え方が変わる面白さを伝え、学習・研究の主体性を引き出す」ことです。学生からも高い評価を得ています。2023～2025年度に担当したすべての学部講義の有効回答を合算すると、Teaching Award への推薦において、6段階評価で最高の「とてもそう思う」が59.5%を占め、次点の「そう思う」を合わせると82.2%となりました（資料2）。学部アンケートでは、「大学入学以来、一番楽しい授業」という趣旨のコメントも多くもらっています（資料3）。教室ではモチベーションを高めてもらった上で、問題演習、プロポーザル、研究発表の3つの課題を提供しています。私の独自性は、「専門家には当たり前の優れた学習・研究・発表の相場観を、豊富な具体例と練習を通じて伝える」ことにあると考えています。

1. 問題集の作成と共有

米国留学を通じて、知識が「わかる」ことと、それを「使える」ことの間には想像以上の隔たりがあり、その橋渡しをするのが、コースワークにおける質の高い宿題だと確信しました。たとえば、相関を因果と見誤らせるバイアスを特定するパターン問題を作成して宿題として課すだけでなく、学生自身にも日常生活の題材から問題を作成させています。学部卒業生向けの就職面接対策として現在も利用されているケース面接の問題集（脇田・吉田（2009）、吉田・木本（2010））を出版した経験もあり、知識を習得しやすい形に分解することには自信があります。以前は、米国の教科書の内容を日本の文脈に置き換える作業を多く行っていましたが、近年では私の作問方針をAIに反映し、定義、正誤問題、

数値計算、簡単な証明といったカテゴリ別に、問題と解答例を効率的に作成できるようになりました。正確性と難易度を確認した上で、学生に提供しています。学生が試験に向けて、頭に汗をかきながら問題を解いて学ぶスタイルを構築しています。

Wakita, S., & Yoshida, M. (2009). Introduction to the Fermi Estimation. *Toyo Keizai Inc.*

Yoshida, M., & Kimoto, A. (2010). Case Studies for Problem Solving. *Toyo Keizai Inc.*

2. リサーチプロポーザルの作成

学部の応用計量経済学と大学院の人口経済学では、研究プロポーザルの作成を課しています。研究者としての私の最大の強みの一つは、「問いを立てる力」にあると感じています。特に、よいリサーチクエスションの立て方という暗黙知を伝えることに力点を置き、着想を研究デザインに変換する力を養うための独自コンテンツを作成しています。学生のプロポーザルから典型的な設計上の問題点を抽出してリストにまとめ、全体へのフィードバックを行うとともに、優秀作を紹介し、毎年、学生の年次に応じた指導資料として蓄積しています。学期始めには、引用と剽窃、協働と模倣の違いを説明して学術倫理を指導するとともに、過年度の優秀作とフィードバックを共有しています。学生が成功例を土台にし、過去の失敗パターンを繰り返さずに取り組むことで、プロポーザルの水準が毎年底上げされています。

AIの進化によってコーディングの参入障壁が下がり、文系でも計量経済学の実装スキルを備えることが当たり前になると考えています。修士学生には修論につながる初期的なデータ分析を課し、研究の設計から分析への移行を支援してきました。今後はRStudioやその後継ツールのPositronのような分析ツールをAIアシスタントと連携させ、分析ノウハウを伝える実践ワークも増やそうと考えています。その際に重要なのは、コードを書いて実行する技能に加え、「結果を解釈して、次に進む力」だと考えています。特に、想定と異なる結果が出たときに、それが「分析の実行上のエラーか、推定の不確実性なのか、仮説の反証なのか」を見極める術を伝えたいと考えています。

3. プレゼンテーション能力を重視した教育

自分や他人の研究を他者に説明し、質問に適切に答えることも、経済学の研究・学習の大きな一部と位置付けています。博士新卒の海外マーケットのジョブトークや数多くの国際学会、および学生時代の英語弁論大会でノンネイティブとしてのプレゼンスタイルを確立しており、学生が学べる技能に分解して教育実践を行っています。

ゼミでは論文のプレゼン法を講義し、過年度の優秀スライドの共有、同意の下での発表録画、その場での個別評価や相互フィードバックを組み合わせ、発表能力を育成しています。アクセントの戦略グループで成果物スライドの作り方を叩き込まれたこともあ

り、学術・実務の双方で通用するスライド作成の基本を体系化して教えています。同僚の教員にフォーマットを共有し、「学生の発表が聴きやすくなった」と好評を得ています。

継続的な改善と今後の展開

着任以来、学生の反応を重視し、授業運営に積極的に取り入れてきました。口頭での発言に加え、リアルタイムツール（Slido）を通じた質問やコメントにも平常点を与え、学生の積極的な参加を促しています。こうした日常的なフィードバックに加え、学期中・学期末の授業アンケートや講義録画による自己評価を活用し、毎学期シラバスや授業内容の改善を重ねています。労働経済学を扱う学部の「人口経済学」は選択科目ながら、2026年度には履修者が270名にまで増加しています。また近年は、計量経済学（秋学期）の履修者の3～5割程度が、労働経済学（春学期）の履修経験者であり、継続履修者も多いです。

AIの急速な進化で、改善サイクルがさらに高度化しつつあります。まず学習支援として、講義資料を基礎知識として回答するVirtual TAを構築し、授業時間外の質問対応や復習支援への活用を目指しています。また、コンテンツ改善のため、音声書き起こしのAI分析で講義での説明のミスの特定制・修正を図っています。収集した学生の質問をテキスト分析し、関心が高い箇所や理解が難しい箇所を特定し、次年度の教材と説明、宿題、試験へ還元するサイクルを確立したいと考えています。AIを教育手段として活用しつつ、AI時代に求められる本質的な思考力を身につけられる教育実践を目指していきます。

資料：担当科目

着任から担当した科目と登録者数は以下の通りです。括弧内の人数は登録者数を、下線はオンライン授業を示しています。早稲田大学の政治経済学部では、一学年が日本語プログラムの約 800 人と英語プログラムの約 100 人で構成されています。

Lectures

- **Population Economics (English/Japanese program)**

Undergraduate-level labor economics

English program: Fall 2020 (10); Fall 2021 (12); Fall 2022 (37); Fall 2023 (36); Fall 2024 (9); Fall 2025 (38); Fall 2026 (30)

Japanese program: Spring 2021 (126); Spring 2022 (63); Spring 2023 (91); Spring 2024 (157); Spring 2025 (151); Spring 2026 (270)

- **Population Economics (Graduate level, English)**

Graduate-level labor economics, causal inference, and research supervision

Fall 2020 (8); Fall 2021 (2); Fall 2022 (15); Spring 2023 (28); Spring 2024 (36); Spring 2025 (14); Spring 2026 (9)

- **Empirical Microeconomics (Japanese program)**

An introduction to causal inference and well-known empirical studies (Japanese)

Spring 2022 (23); Fall 2023 (39); Fall 2024 (68); Fall 2025 (67); Fall 2026 (60)

- **The Political Economy of Innovation (Japanese program)**

An introduction to the latest research on technological change (Japanese)

Spring 2021 (46)

Seminars

- **Intermediate Seminar (English Program)**

Causal inference and research design

Spring 2023 (12); Fall 2024 (14); Fall 2025 (12)

- **Basic Seminar (English/Japanese Program)**

Seminar for first-year students, centered on group reading and presentation of academic papers and foreign-language books, support for campus life

English: Fall 2020 (11); Fall 2021 (11); Fall 2022 (11); Fall 2023 (14)

Japanese: Spring 2024 (17); Spring 2025 (17); Spring 2026 (15)

- **Academic Literacy Seminar (Japanese program)**

Group reading and discussion of *The Economist*

Fall 2020 (7); Spring 2021 (17); Spring 2022 (16)

Informal Research Mentoring

Spring 2021: Ritsu Kitagawa

Fall 2021: Yijie Tao

Spring 2022: Aline Mortha

Fall 2022: Yayue Xiao

Spring 2023: Haonan Li, Pengsheng Zhao

Fall 2023: Haonan Li, Pengsheng Zhao

Spring 2024: Ruiqi Tang

Fall 2024: Yayue Xiao

Spring 2025: Takanobu Toshikawa, Luxin Zhang

Fall 2025: Amadu Jalloh, Yuki Kanno

Spring 2026: Hibiki Kamoshita